

六花
9



2019

りっかはいくかい

鎮

橋涼

山田六甲

沙羅の花に鯉集まれる水の音
天地の間に水音錦鯉
台風の余波は納骨式にまで
西日古い山川登美子記念館
籐椅子に坐してたちまち美人なる
ほほづきや昼の敦賀の写真館
袖に入るばつた可愛や惣五郎
大蟻や遊行の灼けし砂の上
夕立の見舞ひなけれど蝉しぐれ
橋涼み下駄音は水の色して

山中温泉

夕顔や千代女の国を山向う
山中節湯殿を濡らし秋立つか
こほろぎの声十方に橋の闇
山中といふは山中桑いちご
山中や娘^{にや}娘^{ぢや}まんぢゆう盆に入る
炎王に五百羅漢の胸はだけ
潮越の松見残せる暑さかな
月今宵生野の湖のしろがねも
こほろぎの経松虫の鈴大文字

雪嶺抄

夏ひばり

笹村 政子

さざ波の尽くる水辺や杜若
瓜の花京のはづれを道なりに
子の去りて地面を走る夏ひばり
退けばまくなぎの群見えて来し
ほととぎす森の匂ひの漂ひ来

門にいろはあれば

への門に待つてをりたる道をしへ
散りぎはの炎をみたり凌霄花
くぐみ鳴く鳩の来てをり網戸越し
母よりも父の手やさし瓜の花
姉いもと部屋の仕切りの夏のれん

雷鳴をともなひ局部的豪雨
肥後と伊勢八ツ橋で分け菖蒲園
開け閉てに軋む雨戸も梅雨に入る
降り止みしあとのしばらく青葉冷
短夜の途中で目覚め夢惜しむ
喪の家の喪の静けさに軒つばめ
西陣の箴音に馴れ軒燕
梅雨の傘持ち込み大仏殿湿る
山河まだ闇脱ぎきれず明け急ぐ
鑑真忌もうやり直し効かぬ齡

玉虫の色をたがへて発ちにけり

藤生不二男

あぢさゐや時折傘をまはしをり
日暮るるや蛍袋の灯るころ
玉虫の色をたがへて発ちにけり
まばたきを忘れてしづか羽抜鶏
さざ波を追うて戻る植田かな
あめんぼの雨の上がりし水輪かな
白頭鳥ひよどりの濡るる卵の花腐しかな
田水張る音の夜どおしつづきをり

たまむしのいろをたがえてたちにけり ふじおふじお

玉虫はじつとしているとか、死んでい
るときの美しさをいうが、飛び立つとき
の羽の色が違ふと不二男は気づいた。主
宰も翅を割って飛ぶときの色はどのよう
な玉虫色になるのか見たこともない。あ
れこれ想像を働かしてこの句の玉虫を想
像しながら追う。玉虫は金属光沢を發し
ているため、死後も色あせず、装身具に
加工されたり、法隆寺宝物「玉虫厨子」
の装飾として使われたりしている。その
色を言葉で表せといわれても難しい。そ
れをあらわす言葉は玉虫色でしかない。
玉虫色とは辞書に「見方によっていろい
ろに受け取られるような、あいまいな表
現」となっている。困った佳句である。

六甲

雪卿集 せつけいしゅう

住田千代子

谷口 一献

表札の助産婦とありさくらんぼ
石白の金魚まあるく泳ぎけり
白壁をきのふは知らず今年竹
さよならの手に蠓蠓を払ひけり
川からの茅花流しは陸へ向き
日の暮れを急くこともなし麦の秋
よき風に萎れてをりぬ花南瓜
放課後の水遣りの子や瓜の花

父の日の毎年地味になりにけり
黴の香に棚へそろりと戻す図書
梅雨入りの途端今月了りかな
梅雨茸の傘寄せ合うて両想ひ
遠花火案の定音後から来
目眩みす波に撒かるる大西日
斑猫の墓地から先の案内かな
本尊の伏目涼やかなりしこと

志方 章子

葉桜や水面を渡る鳥の影
水滴の黄のしたたれる薔薇の雨
若鮎の目の澄みわたる哀れかな
ヨット浮くさう言へばもうこんな時期
二煎目も甘味残れる新茶かな
樟茂る下に一服してをりぬ
母の顔おぼろとなりぬ衣更
ふらここを天まで漕がば母に会ふ

升田ヤス子

茉莉花の香りのとどく病臥の間
まんまんと水田ひろごる夜の鼻
浦風に尉を散らして穴子焼く
夏のれん浦風通る半間路地
ひろうすに一家言あり夏暖簾
校服のつば広帽子ねむの花
蛭袋母の間ひ切りとうに過ぎ
父親の顔となる僧緑の夜

善野 行

永田万年青

古葉落つ音のしきりに新樹光
泉下にも薄暑はありや亡き友よ
からす瓜咲く夜は秘密明かさうぞ
水を買ひ山の手へゆく百日紅
甘い物買うてしまへり桜桃忌
本山へゆく堀川の薄暑かな
なりはひを問はれとまどふ木下闇
水出すや今年の田作始まりぬ

瓜の花心配事の少し消ゆ
街路樹に登り咲きぬる瓜の芦
お見舞に粒選りの枇杷買ひにけり
大辞典買うてそのまま黴の宿
バスの屋根撫でてをりけり夏柳
つくり池水の錆びぬる早梅雨
大鉢の競ひ合ひたる七変化
仰向きて焦点合はぬ端居かな

藤生不二男

出口 誠

あぢさゐや時折傘をまはしをり
日暮るるや蛍袋の灯るころ
玉虫の色をたがへて発ちにけり
まばたきを忘れてしづか羽抜鶏
さざ波を追うて戻る植田かな
あめんぼの雨の上がりし水輪かな
白頭鳥の濡るる卵の花腐しかな
田水張る音の夜どおしつづきをり

泣き出した空なぐさめて手まり花
夏の暮おもちやにされしスマホかな
梅雨の夜たらいがリズム刻みけり
梅雨時の菜飯炊きたる息子かな
降つて来る水は涙だ七変化
黄緑が最初の色で七変化
ゆるキャラと握手してをり梅雨晴間
梅雨晴間とうとう金の無くなりぬ

雪樹集

江見 巖

平居 濤子

海亀の殻越えてゆく土佐の海

手の届く位置に泰山木匂ふ

混浴の隅に潜みし青とかげ

古井戸の在りし辺りに瓜の花

時の日や一人時間を独り酌む

鉄塔の四脚を葛の競り登る

苔の花寺の柱に刀傷

端正に酔ひし夫なり父の日ぞ

父の日や一日過ごす老人会

辛党に刻む胡瓜を音たてて

金魚藻を金魚に入れて喜ばる

ボトルシップ出航間近梅雨深む

大内 幸子

廣畑 育子

ほととぎす曇天の果鳴き渡る

令和祝ぐ昼日に香る藤の花

朝の庭箒を止める阿菊虫

野遊びの子らに令和の大連休

菊挿してまたも書き込む農記録

子の駆ける改元の日かげんげ田に

植田波しずかな町の午さがり

瓜の花修理工場の裏の畑

土砂降りの電線二羽の燕かな

七つ八つ花付けをりぬ瓜の花

ねむの花風そよがせて夕間暮

花殻にとりどりの色薔薇の庭

田尻 勝子

水馬の水面の空を飛びゆける

青石の一本橋や梅雨の入り

隠り沼糸蜻蛉のみ宙にあり

預かりしまくなぎすぐに返しけり

烏瓜の花目前に現れにけり

ターミナル真中にデイゴの花盛る

延川 笙子

苺苗名残りの春を惜しみけり

独活の香に誘はれて買ふ宿場町

万緑や羽釜ご飯のむすび買ふ

買ひ置きし虫籠に入る火取虫

片影に降ろしてありぬ鬼瓦

戦禍あり変のありたり夏椿

赤松 赤彦

延川五十昭

打水や仲人さんを迎へ入れ

打水や路地に灯ともす先斗町

ビール飲む大言壮語の泡をのむ

打ち水や暖簾に染めし瓜の花

水打つて宿題ひとつ終はりけり

老婦人お不動に来て水を打つ

夏暖簾はらり海老蔵現はるる

老酒に酔えば栗花落の茶亭かな

瓜の花日傘男子の見つめをり

筆求む泰山木の咲く店に

打ち水の四角四面に撒いてをり

足をもて小舟操る西瓜売り

六花集

菊谷 潔

青空も梅雨入り近し雨におひ
皆咲きてあぢさゐ雨を拝みけり
一粒の糲の命の田植かな
蛸の足ぶつ切りあはれ半夏生
時鳥ひねもす鳴いて山若し

磯野青之里

石川憲二

蔵元の長屋門より若葉風
渦に縫ふ麦稗真田夏帽子
トルソーの素描妖しき五月闇
豆飯や家族まとめる母在りて
父の日やだんだん爺に似る目もと

北村ちえ子

篠原 敬信

夕立や四阿に坐しずぶぬれに
朝霞空にかくれる丹生山
庭の薔薇絵にする人と写メとる子
雨誘ふ藤棚に来る鳩の群れ
雷や雨戸をたたたく雨の来し

荒れ畝や遅まきながら種を買ふ
天皇賞どよめく中の紙吹雪
五月晴人はたかりて宝くじ
アーケードそぞろ歩きの梅雨の入り
梅雨入りや鈍い響きの草刈機

蜩雪譚 山田六甲



笹村 政子
さざ波の尽くる水辺や杜若

さざ波が杜若の咲く水辺に来て尽きたというのだ。さざ波は美しいがそれより美しい杜若によって消された。美しい物は美しい物によって消される運命にある。

雷鳴をともし局地的豪雨

佐津のぼる

私たち子どもの頃昭和初期には単なる夕立や白雨といったが、今は激しい局地的豪雨などと用いるようになった。また雨の降り方も激しいが、山林の保水力も落ちて、上層部の土が滑って土砂崩れなど大きな被害が出るようになった。夏の暑さに一雨くればいいのに、などとのんびり呟いていたのは昔の話。

表札の助産婦とありさくらんぼ

住田千代子

現代でも助産婦制度はあるが、産婦人科は医者が仕切る。私たちの世代は村の助産婦さんが取り上げてくれたから、村で相当の荒くれ者でも助産婦さんには頭が上がらない。「あんたも、あんたのお母ちゃんも私が取り上げたんや、文句あるか」と一喝されるとしょぼんとなるのである。イサムちゃんがよく通っていた「哀」のママさんは夜に飲食店を出して、昼は病院で助産婦をしていたが、この間働き過ぎで死んだ。無理をして、精いっぱい生きて死ぬか、無理をせずゆっくり生きて長生きするかはその人の生き方。しかしこの世で出あう人は過去世で姉弟だったか親子であった人という。年を経て出会う人は前世で引き裂かれた人という。